

若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP)

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成22年度派遣報告書

——エチオピア・アジスアベバ大学, マーレ語, H22. 8. 3-H23. 2. 3——

平成22年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程1回生

有井 晴香

#### 自身の研究テーマについて

近年、サブサハラアフリカ諸国では学校教育が急速に普及してきている。中でもエチオピアにおける初等教育の就学率はここ数年で飛躍的に上昇している。それに伴い、教育の質の低下、男女間・地域間格差の拡大などが問題としてとりあげられてきた。しかし、これらの議論は、統計資料にもとづくものや、国家の政策レベルの観点から論じられることが多かった。実際に就学者が急増したことによって、地域社会にどのような変化をもたらされたのか、について具体的な事例に基づいて検討した研究はほとんどなされていない。地域社会の変化は様々な要因が複雑に絡み合って生じるものである。本研究では複合的要因のひとつとして教育実践に焦点をあて、近年のアフリカ農村で見られる変化を検討することを目的とする。特にエチオピアの農村出身者が初等・中等教育を終え、卒業後どのような進路を選んだかを調査し、その結果地域社会にどのような変化が生じたのかを分析し、考察する。

#### 研修言語の概要

エチオピアには約80もの言語があるとされる。研修言語であるマーレ語は、言語系統的にはアフロ・アジア語族のオモ系言語と位置づけられ、主な母語話者はエチオピア西南部に約7万人いるといわれているマーレという人びとである。

マーレ語は独自の文字を持たず、アムハラ文字を表記に用いた冊子、新約聖書、アムハラ語マーレ語辞書が存在する。しかしながらマーレ語による刊行物はごくわずかである。

#### 語学研修の内容について

語学研修は、エチオピア西南部のジンカ市にある、アジスアベバ大学管轄の南オモ研究センターにて、ほぼ毎日2時間ずつの授業を受けた。講師の母語はマーレ語ではなかったが、以前マーレに10年間住んでいた経験があり、マーレ語を母語話者と同じくらい話すことができた。授業は質問を中心とした、1対1の形式で行われた。授業ではマーレ語と英語を使用した。基本的な単語、表現を最初に学び、その後は、私が知りたい表現を英語で聞き、それを講師がマーレ語に訳す、という形式だった。

研修期間中はマーレの農村にホームステイし、授業以外では彼らとマーレ語で会話するよう努めた。授業で学んだ表現を実際に使ってみて、微妙なニュアンスの違いなどを修正していった。また、会話の中で理解できなかった言葉や文を何度も聞き直しながらできるだけ正確にノートに書き取り、後日マーレ語の講師に質問することで少しずつ語彙を増やし、基本的な文法構造を容易に理解することができた。マーレ語にある程度慣れてきたところで、分からない言い回し、言葉はなるべくその場でたずねるようにした。その際、分からない単語を使った別の例文を示してもらうようにした。更に、その分からない言葉を別の何人かの人にも質問し、例文を増やしていくことで理解するようになった。この方法をとることによって、更に新しい言葉と言い回しを習得することができ、また人間関係の形成にも役立った。



写真1：授業の様子

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

マーレの人たちは、友人がどこかへ行くときに「〇〇から戻ってきたら私に何をくれるの？」という言い回しをよく用いる。一種の冗談なのだが、これが冗談ではない場合もあり、私にとって日々「お前は私たちに何をくれるんだ？」と言われることが大きなストレスになっていた。ある日ストレスが限界に達し、もう嫌だ、と思っていたときに、ステイ先の父が「人があなたを家に呼びたがるのはみんなあなたの声を聞きたいからだよ。どのくらい言葉をおぼえて、どんなことを話すのか、それを知ることが毎日楽しみなんだ。」と言ってくれたことで、とても気持ちが楽になり、また語学研修の励みになった。

### 目標の達成度や反省点について

今回の語学研修において設定した目標は、通訳を介さずに報告者自身がマーレ語でコミュニケーションをとったり、インタビューを行ったりできるマーレ語の会話能力と、それらを行うのに十分なマーレ語の語彙の収集であった。語学研修を通して、日常生活を送るのに十分なマーレ語の会話能力はついたが、インタビューを行うにあたって、専門的な用語がわからず、聞きたいことが聞けないことが多々あった。また、聞き取りも、分からない単語があると、会話を中断しなくてはならず、スムーズに会話を運ぶことが困難であった。今後の課題としては、更なる語彙の収集があげられる。語彙の点で、エチオピアの共通語であるアムハラ語起源の言葉も多く見られたので、今後アムハラ語の学習をすすめていく必要性も感じた。



写真2：村の小学校の教室